



重文 旧西尾家住宅主屋ほか6棟建造物保存修理事業だより

No.1



令和5年3月

吹田市教育委員会
文化財保護課

1 旧西尾家住宅について

旧西尾家住宅は吹田市の南側、神崎川の北側の内本町に位置します。この辺りは、江戸時代には吹田村の中心地で、「渡路洲」(あるいは「都呂須」と呼ばれ、京都と大坂を結ぶ舟運の拠点でありました。

吹田村は、旗本の竹中氏や柘植氏の領地、さらに仙洞御料が入り組んだ状態になっており、村役人もそれにあわせて三方にわかれていました。西尾家は、三方のうち仙洞御料の庄屋を務めていた家でした。

明治になると、西尾家は地主や山林業を営みました。いま建っている屋敷は、明治 26 年(1893 年)から大正時代にかけて、西尾家の 11 代目與右衛門義成と、その子である 12 代目與右衛門義雄によって建築されたものです。



1 旧西尾家住宅 敷地全体模型

敷地は約 60 メートル四方で、東面の南半分以外は道路に接し、南側に表門があります。敷地北半分の東寄りに主屋が建ち、さらにその北側に東からいぬいどぞう 戌亥土蔵、いぬいすみどぞう 戌亥角土蔵、せきすいあん 積翠庵が並んでいます。また主屋の東側にこめくら 米蔵、敷地の南寄りに離れ東棟、離れ西棟が建っています。

以下、各棟の「構造及び形式」を記載します(文部科学省告示第七十二号より抜粋)。

旧西尾家住宅 7 棟

主屋 玄関部、居住部、計量部屋部からなる

玄関部：木造、建築面積 72.22 m²、棧瓦葺、北面居住部に接続

居住部：木造、建築面積 285.61 m²、一部二階建、棧瓦葺、渡廊下・浴室棟・客便所棟附属

計量部屋部：木造、建築面積 140.86 m²、棧瓦葺、西面居住部に接続

積翠庵 木造、建築面積 44.69 m²、棧瓦葺一部銅板葺

離れ西棟 木造、建築面積 171.22 m²、棧瓦葺一部銅板葺

離れ東棟 木造、建築面積 92.91 m²、棧瓦葺、表門・渡廊下附属

戌亥土蔵 土蔵造、建築面積 63.24 m²、二階建、本瓦葺

戌亥角土蔵 土蔵造、建築面積 22.05 m²、二階建、棧瓦葺、蔵前附属

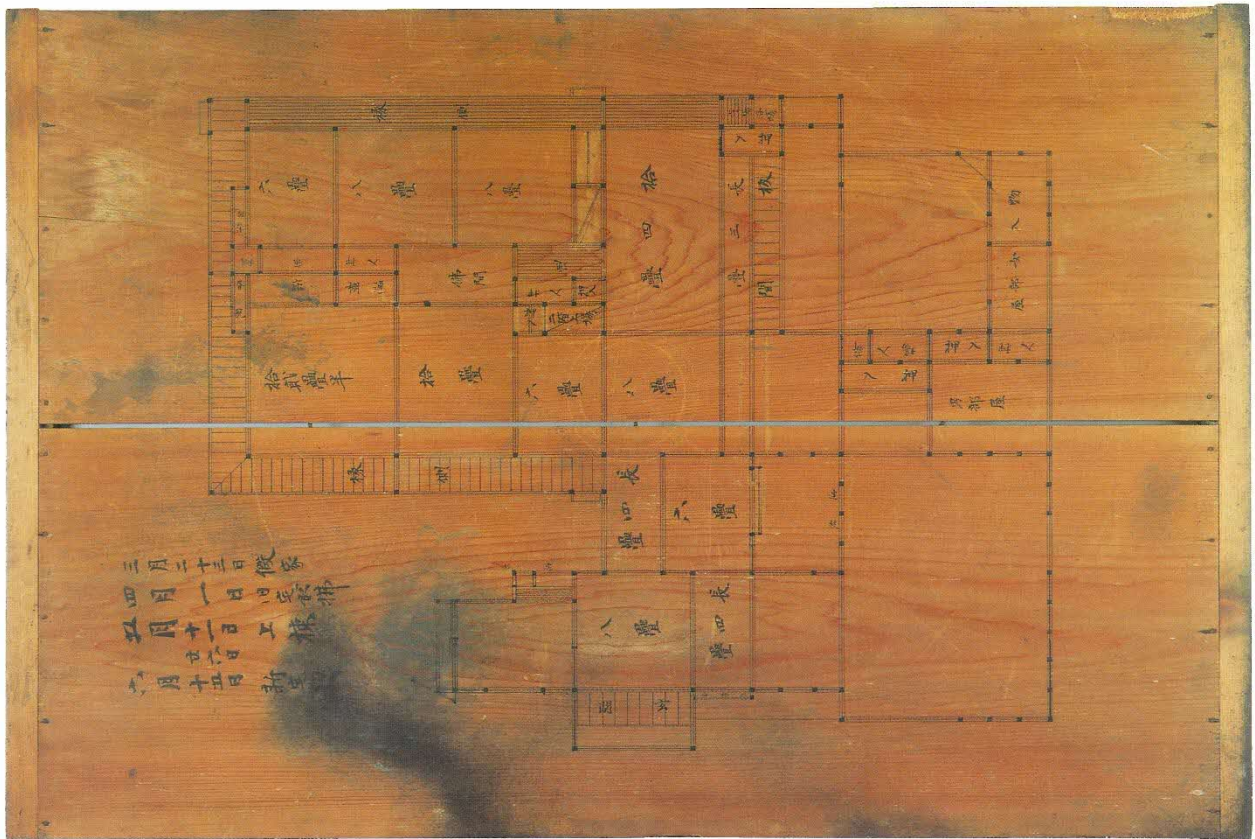
米蔵 土蔵造、建築面積 39.99 m²、本瓦葺

宅地 4,542.37 m²
34 番、739 番、741 番、742 番 2、2896 番 8、2896 番 9、3935 番

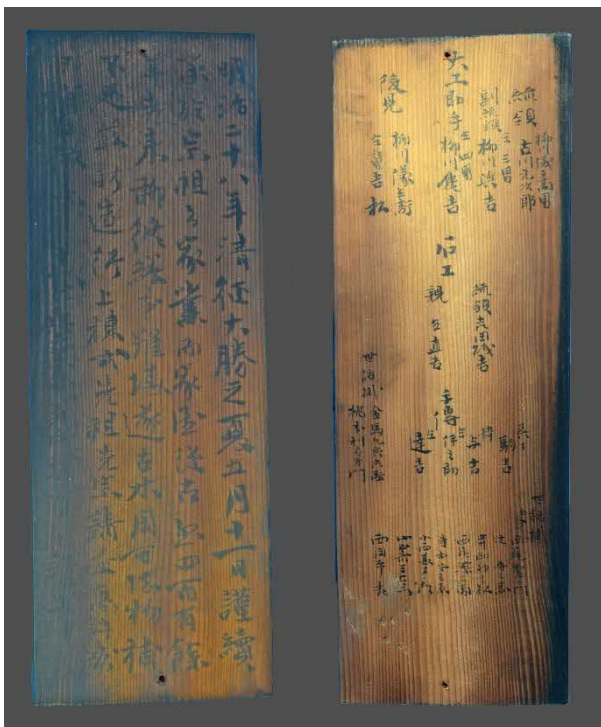
上の地域内の納屋、外堀、内堀、庭門、四腰掛、石灯笼、防火水槽、温室基礎部を含む

「旧西尾家住宅は、伝統的な民家形式を発展させた大規模な主屋をはじめ、近代的で瀟洒な意匠になる離れや茶室などが建ち並び、関西地方における都市近郊の大型近代和風住宅として価値が高い。蔵や納屋などの附属屋もよく残り、屋敷全体の構成を完存している点も貴重」※であることから、敷地内の工作物とともに、宅地も併せて、平成 21 年(2009 年)12 月 8 日、重要文化財に指定されました。さらに令和元年(2019 年)9 月 30 日、宅地に付随する建物として外堀・内堀が追加指定されました。

※『月刊文化財』555 号(2009 年 12 月)「新指定の文化財」より抜粋



2 主屋板図 主屋の平面図を描いた板が残されていました。現在とは少し間取りが異なる部分もあり、計画段階の図面と考えられます。



(表面)

(裏面)

3 主屋棟札 建物の新築や修理を行ったときに作成する、工事の背景や目的、施主や参加した職人の名前を記録した板を「棟札」と言います。上の写真は明治 28 年(1895 年)に主屋を上棟したときの棟札です。



4 主屋古写真 主屋の過去の写真です。下段の写真は3頁の写真 6 とほぼ同じアングルです。古写真を撮ったあと、現在までのあいだに、縁側が改造されたことがわかります。

2 工事の概要

旧西尾家住宅の建物は、老朽化に加え近來の地震や台風の被害もあって、かなり損傷が目立つ状態になっていました。また平成 28 年度（2016 年度）から同 29 年度（2017 年度）に実施した耐震診断の結果、多くの建物が大地震時に倒壊するおそれがあることがわかりました。そこでこのたび、明治に建造されて以来はじめての大規模な修理工事を行い、あわせて各建物に耐震補強を施していくことになりました。

主屋のほかにも、離れや土蔵、納屋など、敷地内の数多くの建物の修理が必要ですので、工事をⅠ期とⅡ期に分けて実施します。Ⅰ期工事では主に主屋、米蔵、納屋（米蔵北）、納屋（北東）、外塀（旧蔵納屋外壁）の 5 棟を修理する予定です。

なお本事業は、国庫からの補助を受けて実施します。

事業主：吹田市

事業指導：文化庁文化財資源活用課
大阪府文化財保護課

設計監理：一般財団法人建築研究協会

工事請負：株式会社中島工務店神戸支店

事業場所：大阪府吹田市内本町 2 丁目 15 番 11 号

工事方針：主屋 半解体修理

（Ⅰ期工事）米蔵 半解体修理

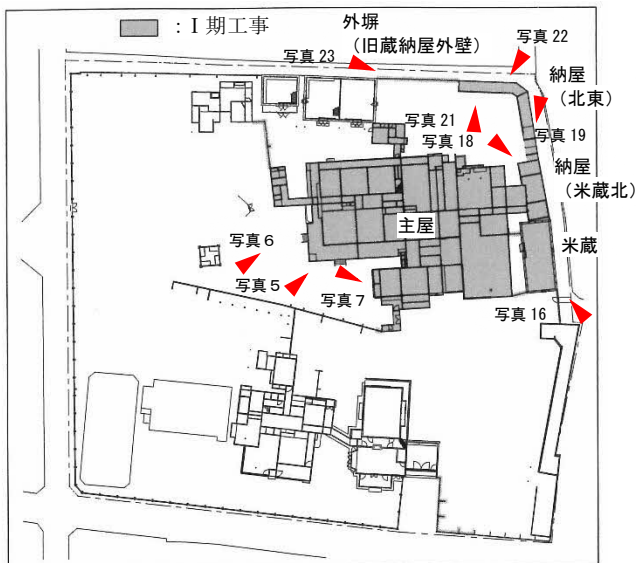
納屋（米蔵北） 解体修理

納屋（北東） 解体修理

外塀（旧蔵納屋外壁） 解体修理

工事期間：令和 4 年（2022 年）7 月から令和 9 年（2027 年）3 月まで（Ⅰ期工事）

3 修理前の旧西尾家住宅



配置図（Ⅰ期工事で修理する建物のみ名前を記載）



5 修理前 主屋南面(居住部)



6 修理前 主屋西面(居住部)



7 修理前 主屋西面(玄関部)



8 修理前 主屋内部 座敷



9 修理前 主屋内部 上り口から室内を見る



10 修理前 主屋内部 縁座敷



11 修理前 主屋内部 味々庵



12 修理前 主屋内部 式台玄関



13 修理前 主屋内部 二階表八畳



14 修理前 主屋内部 計量部屋



15 修理前 主屋内部 台所



16 修理前 米蔵南面・東面



17 修理前 米蔵内部



18 修理前 納屋(米蔵北)・納屋(北東) 敷地側



19 修理前 納屋(米蔵北)・納屋(北東) 道路側



20 修理前 納屋(米蔵北) 内部



21 修理前 納屋(北東) 敷地側



22 修理前 納屋(北東) 道路側



23 修理前 外塀(旧蔵納屋外壁) 道路側

4 文化財建造物の保存修理とは

文化財建造物は経年による劣化や様々な要因による破損を免れることができません。そのため、文化財としての価値を長く維持していくにあたっては、適切な日常管理とともに、今回のような大規模な保存修理を行うことが必要となります。

保存修理では、破損が主要構造部にまで及んでいるような場合、建物を分解して、損傷した各部材を取り替えたり修繕したりしていきます。その際、すべての部材をいったん分解して組み直す工事を「解体修理」、主要な軸組材（柱・梁など）を分解せずに行う工事を「半解体修理」といいます。



24 主屋 浴室棟 解体工事中 主屋の浴室棟は「解体修理」としました。

保存修理を進めていくにあたっては、文化財としての価値を損なわないよう、修理の方針や方法を検討します。とくに文化財建造物の保存修理においては、建設当初の材料の保存を尊重しながらも、建物としての一定の強度や耐久性を確保することが求められます。また、古い建物は、建設から現在に至る間に、さまざまな改造を加えられていることがあります。なかには改悪と言わざるを得ないものもあり、その場合は、当初の形式に復原することも検討しなければなりません。

こうしたことを間違いなく実行していくために、保存修理では以下にあげるような調査を綿密に行います。

- ・ 建物の様々な部分を実測し、建設当初の寸法を確認する。
- ・ 建物の破損箇所やその状況を確認する。
- ・ 建物にどのような材料や技法が用いられているのかを確認する。
- ・ 建物がどのような修理・改造をこれまでに受けてきたのかを示す痕跡を確認する。
- ・ 棟札などを含む建物に関連する史料を調べ、建物の歴史を文献から確認する。

これらをまとめた実測図、調書、写真などの記録に基づき、また今後、活用していく上での耐震性や利便性などの要素も加味し、総合的に「文化財としての価値」を判断したうえで、修理方針や修理方法を決めていくことになります。

5 本工事の内容とこれまでの進捗状況

主屋と米蔵は現在のところ半解体修理とする予定であり、建物を素屋根という覆屋で囲った上で、破損部の修繕と耐震補強を実施していきます。素屋根の建設は現在ほぼ完了しています。

またこの2棟については、建物をいったんジャッキアップする予定です。これは柱の根元や土台の腐朽箇所を修繕すると、主屋においては、耐震補強の一環として鉄筋コンクリートの基礎を新設するためです。



25 参考ジャッキアップ状況 ある別の現場で建物をジャッキアップしたときの写真です。このように鉄骨などで組んだ支保工を下から突き上げて建物を持ち上げ、足元の部材が修理可能な状況を作り出します。

また納屋（米蔵北）、納屋（北東）、外塀（旧蔵納屋外壁）は解体修理を行う予定です。

令和5年（2023年）3月段階での各棟の進捗状況は以下の通りです。

主屋：居住部に付属している「浴室棟」「客便所棟」、玄関部に付属している「露地門・雪隠」、計量部屋部のうち「女部屋の東部分」は、素屋根の建設に先立ち全解体としました。

米蔵：床廻りを解体しました。

納屋（米蔵北）：解体が完了しました。

納屋（北東）：解体が完了しました。

外塀（旧蔵納屋外壁）：解体が完了しました。

その他：敷地南側の外塀の一部を工事用搬入路建設のため解体し、前庭部分を作業場として整備しました。

主屋 - 露地門・雪隠



26 露地門・雪隠 修理前 東から見る 修理前の時点で、瓦をすでに降ろし、シートで養生していました。



27 露地門・雪隠 屋根解体中 屋根の下地には杉皮が用いられていました。



28 露地門・雪隠 壁解体中 土壁の下地(小舞と言います)には竹を用いるのが一般的ですが、西尾家では葦が多く使用されていました。



29 露地門雪隠 軸部解体中 順を追って建物を「解体」している最中の写真で、建物を軸組材だけの状態にしたところです。この状態で解体を止めると「半解体」と言います。

主屋 - 客便所棟



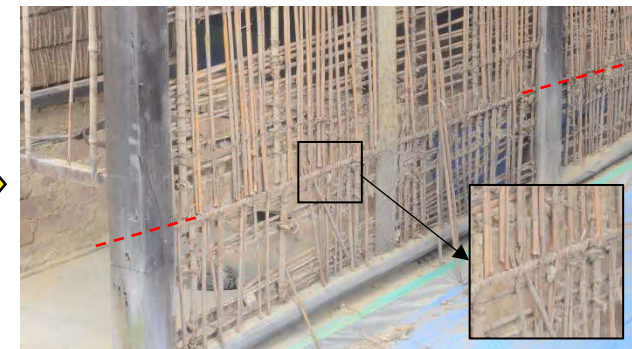
30 客便所棟 修理前 西から見る 一見、大きな破損はないように見えます。(右に続く)



31 客便所棟 屋根解体中 しかし瓦を解体すると、雨漏りによって、瓦下の野地板の腐朽が進行していることがわかりました。



32 客便所棟 壁解体中 写真 30 の丸囲み部分を荒壁の状態まで解体した写真です。点線の上下で明らかに壁の状態が変わっており、施工をした時代が異なることが想定されます。また写真左の柱の根継補修とも関係がありそうです。



33 客便所棟 壁解体中 さらに壁土を解体すると、縦方向の小舞がすべて点線のところで途切れていることがわかりました。したがって、点線から下の部分については、壁をいったん解体し、左の柱の根継を行った上でまた塗り直すという修理が、過去に行われていたと考えられます。

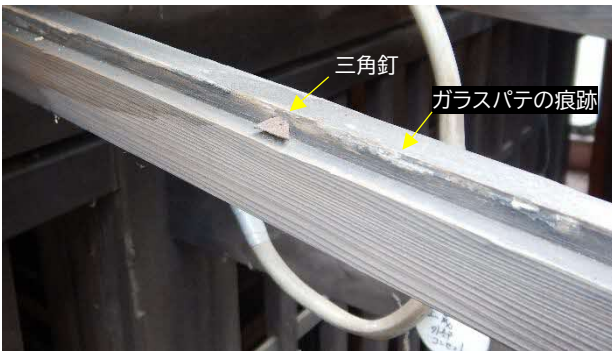
主屋 - 浴室棟



34 浴室棟 修理前 西南から見る 修理前には、庇は鉄板葺になっていましたが、明らかに近年の改造でした。



35 浴室棟 庇解体中 鉄板葺を解体したところ、垂木の上面が凸になった、少し変わった形式であることがわかりました。



36 浴室棟 庇垂木側面 庇の垂木をさらによく調べると、ガラスを留めるために用いる三角釘やパテの痕跡が数多く残っており、当初はガラス板葺の庇だったことがわかりました。



37 浴室棟 壁解体中 浴室棟の小舞下地は主屋の他の場所とは異なり、すべて竹を用いていました。浴室棟は後で増築された部分と言われていましたが、その証拠の一つとなりました。



38 浴室棟 修理前 浴室部分



39 浴室棟 浴室部分解体中 浴室部分は煉瓦で造られていました。西尾家では床・壁などに煉瓦が多く使用されています。

主屋 - 女部屋



40 女部屋 修理前 部屋境小壁上部(東から見る) 女部屋の室内の小壁の上部に鉄格子が嵌められていました。現在、部屋境になっている壁が、当初は外部に面しており、鉄格子は換気(煙出し)のために設けられていたと考えられます。

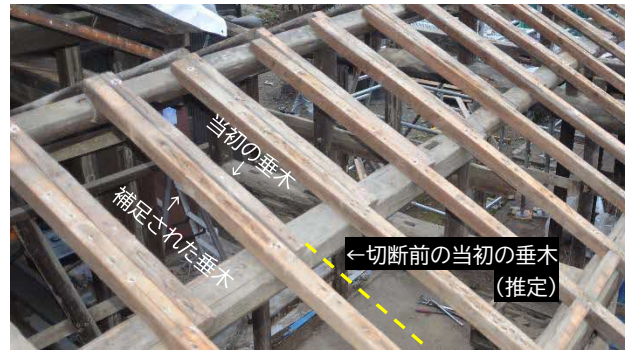


41 女部屋 東部分解体完了 女部屋の東部分の解体が完了したところです。(写真のベニヤ板の奥が西部分になります。) 東部分の床下は煉瓦敷となっていました。

納屋（米蔵北）



42 納屋(米蔵北) 屋根解体中 納屋(米蔵北)の屋根は、東流れ(写真右手)の方が大きく破損した状態にありました。しかし、板を留めている釘は、東流れの方が新しいタイプのものが用いられていました。



43 納屋(米蔵北) 屋根解体中 東流れ 東流れの垂木は、当初材を母屋の位置で切断し、それに添わせて補足材を取り付けていました。この改造は上に板を張った状態では不可能なので、過去に野地板を張り替えていたことがわかりました。



44 納屋(米蔵北) 解体中(南から見る) 納屋(米蔵北)の室内北面、東面と西面の一部には、柱と柱の間に荷摺木という材(室内に米俵などを持ち込むときに、土壁に直接ぶつかるのを防ぐ)が建てられていました。



45 納屋(米蔵北) 軸組解体中 東面 納屋(米蔵北)の柱には現在は使われていないホゾ穴がたくさんありました。通常は各ホゾ穴に対応する部材がかつて存在していたと推定するところですが、この建物にこれほど多くの部材があったとは考えにくく、この場合は別の建物の柱を転用したためであると見られます。

納屋（北東）



46 納屋(北東) 屋根解体中 西流れ 納屋(北東)の屋根は大半の部分でこの写真に見えるような形式であり、道路寄りに棟木を設け、一本材の垂木を架けていました。



47 納屋(北東) 屋根解体中 西流れ南端 納屋(北東)の屋根のうち、南端の一角だけは形式が異なっていました。母屋の位置で当初の垂木がすべて途切れており、そこから棟木までの間の垂木は、後に補足された材になっていました。母屋や棟木の位置、高さもほかの場所とは異なっていました。また痕跡から見て、この一角の母屋は、かつては棟木であったと考えられます。



48 納屋(北東) 南面西端 納屋(北東)の一部には、外側に竹格子をはめ、内側に板戸を入れた窓が設けられていました。納屋には珍しい形式ですが、これがどのような意味を持つのか、今後、調査が必要です。

米蔵



49 米蔵 壁板解体 米蔵の壁板を取り外したところ、中に砂が詰められていることがわかりました。防犯のためと思われます。

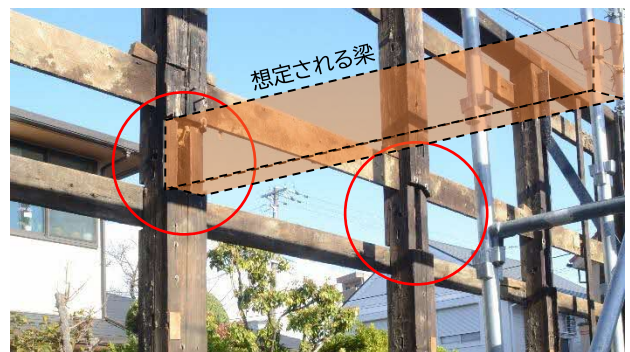


50 米蔵 床組解体 米蔵の床板を取り外したところ、根太を取り付けるための土台の欠き込みの痕跡が、現状とは異なる位置に残っていました。

外塀（旧蔵納屋外壁）



51 外塀(旧蔵納屋外壁) 壁板解体 柿渋塗装中 外塀の壁板には舟板が用いられており、特徴的な意匠と考え、破損がかなり進行していましたが、なるべく材料を再用できるよう慎重に解体しました。

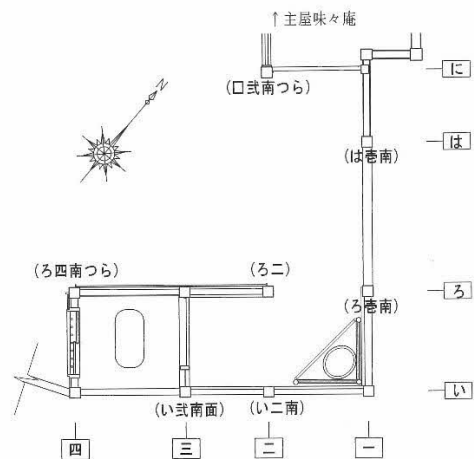


52 外塀(旧蔵納屋外壁) 軸組解体中 外塀の柱には現在は使われていない大きなホゾ穴(写真丸囲み部分)がありました。もともとは、敷地の方に向かって梁が架かっていたと想定されます。

その他の工事状況



53 各部材記録写真 柱墨書 解体した部材は個別で記録写真を撮影し、実測を行います。また墨書が見つかることもあります。写真は雪隠の柱で、頂部のほぞに「い式南面」という墨書がありました。これは建設時に、柱を建てる位置を記したもので、「番付」といいます。各柱から見つかった墨書を整理すると右の図のようになり、建設時にどのように番付していたのかを推測することができました。



()内は墨書の文字

□内は墨書から推定した番付



54 主屋-米蔵間通路 修理前 主屋と米蔵の間の通路は煉瓦敷きで、一部モルタル塗りとなっていました。



55 主屋-米蔵間通路 モルタル解体 モルタル塗りを解体すると、便所の跡が現れました。これはまったく予想外の発見でした。



56 主屋 居間の畳 修理前は箆笥の下に隠れていましたが、おそらく当初と思われる古い畳表が残っていました。



57 主屋 居間の畳 見つかった畳の畳表(たたみおもて)は琉球表と呼ばれる、やや丈夫なタイプのものでした。また畳縁(たたみべり)は革製で、今ではかなり珍しい仕様ですが、当時は、耐久性が求められる場所に、それなりに用いられていたようです。



58 主屋 座敷の畳 座敷などの畳の畳裏(たたみうら)は手縫いの丹波裏が用いられており、かなり上等な仕様でした。また畳床も手縫いでした。



59 台所の配電盤 西尾家の台所には、たいへん立派な旧式の配電盤が現存していましたが、その場所の床を解体したところ、多量の古い配管が現れました。



60 主屋・米蔵 素屋根建設中 主屋と米蔵の周囲に仮設の覆屋(素屋根)を建てて、解体中の建物が雨に濡れることがないようにし、天候に左右されずに工事を進めています。

重文 旧西尾家住宅主屋ほか6棟建造物保存修理事業だより

No.1

令和5年(2023年)3月31日発行

発行元 吹田市教育委員会 文化財保護課

資料作成 一般財団法人建築研究協会
旧西尾家住宅設計監理事務所